

哲学の原義

—アンティステネスの場合—

社会・哲学 小澤克彦

はじめに。

現在の哲学史というのは近代以降の哲学観に基づいて論述されているので、近代以降の哲学的問題とその方法論に合致しているものだけが大きく取り扱われ、それと異なるタイプの問題や方法はほとんど無視されるという性格を持っている。したがって我々の持つ哲学史は「存在論」や「認識論」的な側面が主要問題とされ、その問題を扱う方法論も「体系的」であることが要求されている。そのためその弱い、たとえばここで取り上げるアンティステネスたちはまるで「三流」哲学者のように扱われている。

しかし、日本語で哲学と訳されている「フィロソフィア」というものが生れて発展していった古代では決してそうではなかった。なぜならフィロソフィアという言葉は、ソクラテスが示しているように、本来「知の愛し求め」という原義を持ち、そしてその「知」とは「良く生きることについての知」であった。つまり、その目的というのは現実的に「良く生きる」ということ、つまり人生の形成論にあり、その「良さ」とは何かということでは理論的追求がなされたのであって、理論とは「現実によく生きるために」追求さるべきものだった。したがって、ここでは哲学とは「良く生きよう」としているか否かが先ず問題だったのであり、そこにどんな体系的な理論があるかは二の次であるのが本来であった。

実際、体系的な理論哲学の代表とも思われているアリストテレスですら、「理論に逃げ込んで」それで哲学しているつもりになって本来の目的である「良き人となる」ということをなおざりにしている態度を批判し、それは医者言うことはきくけれどその言葉に従って健康になるための実際活動をしていない患者にたとえているほどであった①。この哲学のあり方はもちろんストアやエピクロスにおいて生きていた。

こうした哲学観が本来の哲学観だったのであり、それはローマ期の「哲学者列伝」を書いたディオゲネス・ラエルティオスに明らかに示されている。つまり、ソクラテスとの関係で言えば、ディオゲネス・ラエルティオスはソクラテスの弟子達の中で代表的な哲学者ということで「プラトン、クセノフォン、アンティステネス」の三人を挙げている②。しかし、今日我々の持つ哲学史での扱いはほとんど「プラトンだけ」で、仮にアンティステネスが扱われても多くの場合はストア派を結果的に用意した人くらいの扱いでほんの付け足し程度に言及されるにとどまり、クセノフォンに至っては名前すらでてこない。その理由は、世界や存在についての「体系的理論」がプラトンには存在しているけれど他の二人には無いからに他ならず、クセノフォンに至っては著作こそたくさんあるけれどもいわゆる哲学理論の書は無く、それどころか「弟子」もおらず全く近代的な意味合いでの「学問的体裁」を持っていないからである。

こうした古代と近代の違いは当然「哲学観」の異なりから生じたもので、古代と近代ではその理解に大きな異なりがあるのである。つまり、古代は「良き人となる」という「実践」が、近代では「世界解釈の理論」が哲学の内容とされているということである。

どうしてそんなことになってしまったのかの原因は主に中世にある。つまり、そこでの哲学は、これはどう言い訳をしてみても全くキリスト教神学の理論構築の手段でしかなく、「本来の人間のあり

方]「人生のあり方」を追求し実践したり、あるいはその人間が存在しているこの世界の構造を権威にとらわれず思考するということはあり得なかった。なぜなら「すべての真理」はすでに『聖書』に与えられていたからである。「良く生きる」という哲学本来の問いは「キリストの神に従って生きる」ということが真理とされそれ以上の問いや答えは許されず、またその「証言」は『聖書』の言葉として与えられているとされていた。そして、哲学というのは聖書に示された「世界の整合的な理論付け」のために利用されたにすぎなかった。したがってここに見られる哲学は、どう反論したところで俗に言われる「神学の召使い」でしかありえず、その役割は「キリスト教的世界像の構築の学」という性格でしかありえなかったのである。

他方、近代になってこの「キリスト教的世界観」を捨て去ろうということになって「神」を棚上げしたのだけれど、今度はその「神」によって統一されていた「人間と自然」の関係が説明できなくなって、結局哲学の課題とはその「人間と自然の関係」を説明することとなってしまったのである。これは中世での哲学観の流れにあるから何ら疑問を持たれることなく「哲学とは世界解釈の学」とすんなり認められてしまった。

こんな具合に一口で「哲学」といっても、古代から中世、近世とその理解の仕方に大きな異なりが見られるわけである。どうしてそうなったのかは、哲学に対して人々が期待したものが異なるからであろう。これはどの時代の誰の哲学を見る場合にも大事なことなのに、しかし哲学史ではほとんど指摘されていないことなので、もう一度確認しておきたい。

つまり、古代は「フィロソフィア=哲学」というものが生まれ育った原点の時代であるが、そこでは「フィロソフィア」という言葉の原義である「愛知」つまり「良く生きることについての知の愛し求め」という言葉がはっきり示しているように、先ず「生きる」ということのあり方が問題で、そのために第二段階目としてそれについての「主張・証言」が求められ、ついでそれを体系的に示す「理論」が追求された。つまり哲学に三段階があったのである③。だから先に挙げたアリストテレスは「第三段階目の理論」だけに走っている連中を批判して哲学とは「第一段階」があつてのことだろうと批判していたのである。

しかしキリスト教が絶対的な支配をした中世になると、第一段階目の「生きる」という哲学本来の問題はキリスト教によって「真理」が与えられてしまったのでそれが問題にされることはなくなり、また第二段階目の「生きる」ということについての「証言」も『聖書』にあるとしてこれも問われず、結局その「理論付け」として第三段階目に「従」の立場にあった「世界解釈の理論」がギリスト教教義の「理論付け」に使えるということで採用されて、それが哲学の課題として残されたというわけであった。

近世は、キリスト教に依拠した中世の哲学を捨て去るところからはじまったので、キリスト教神学に奉仕していた哲学に代わる新しい世界理解のための哲学をうち立てなければならないとされた。こうしてキリスト教的世界解釈に変わる「新しい世界解釈」としての哲学が要求されたのであるが、「神」を棚にあげてしまったところで存在として見えるのは「人間」と「自然」だけになっていた。だから先ず、この間関係をどう見なければならないかが第一の問題にされたのである。

ちなみに古代では「人間と自然」の関係は「自然と自然の一部としての人間」という理解の仕方でも一定していた。中世は両者とも「神の被造物」として「神において統一」されていた。ところが近代にはこの古代的な世界観はなくまた中世キリスト教的な世界観も否定したのであるから「全くははじめから考え直す」必要があるとされたのである。これが近代哲学に要求されたものだった。だとしたなら哲学とは「存在論」であり「認識論」、いってみれば「世界の解釈学」になり、それは人間理性によって理解された理論的・体系的なものでなければならないとされたのも当然であったのである。こうして古代ギリシアに生まれた本来の哲学観は捨て去られ「人生の形成論」としての哲学はついに復

活しなかったのである。

しかし今、近代的な哲学観だけが「哲学」だとすることに大きな危惧と問題がある。というのも、今我々は地球規模での大きな問題に直面している。一つは「生命」というものをどう考えるべきかということで、これは「遺伝子操作、クローンの創造」という場面で言われてくる諸問題、また「臓器移植」などで問題とされる「死」とか「人間の臓器はただの物質」とする考え方に対する疑義、さらに「動・植物は人間の都合によって左右されて良い」とするかのような「生命とは人間のそれ」とする考え方に対する反省などから提起されている「生命」の問題で、二つには「地球温暖化」を始めとするさまざまな現代文明のもたらした「地球危機」で、ここにきていったい「近代文明とは何だったのか」「近代の人間の生き方、考え方、価値観はどう評価されるべきか」という問題がでてきたからである。こうした問題の根は近代の哲学、つまり「人間中心主義」「科学主義」「進歩史観」などにあることはいうまでもない。したがって、すでに「近代哲学が正しいものの見方」などと呑気に構えてはいられないのである。もちろんだからといってそのまま古代や中世に帰ることなどではしない。しかし、こうしたいきづまりにあったとき、何事にせよこれまで人類はどういう考え方をしてきたのかということ振り返ってみるのは、新しいものの考え方を見いだしていく上で有効であるのはこれまでの人類史に明らかである。そうした意図のもとに我々は古代での「哲学の本義」をもう一度問題にすべきであろうと思うのである。そうした意図のもとにここではディオゲネス・ラエルティオスがプラトンと並んだソクラテスの三大弟子の一人としてあげていたアンティステネスの場合を探ってみたいと思う。ここにソクラテス以降の哲学の一つの方向を顕著に示す哲学理解があると思われるからである。

アンティステネス

さて、哲学という営みを「愛知（フィロソフィア）」という言葉で始めて提唱し、その内容を理論的に示し、また人間としてのあり方を具体的・実践的に体现させたのはソクラテスであった。そのソクラテスを承けてその弟子達はその哲学を継承していったが、一般にはプラトンがその代表とされ、さらにその弟子アリストテレスと解説されていく。これはこれで一つの方向であるからいいけれど、しかし一方で古代にはそれとは異なった系譜の哲学があり、それはアリストテレス以降むしろ時代の本流となっていた。いわゆる「ストア学派、エピクロス学派、懐疑学派」といったヘレニズム・ローマ期の哲学の流れで、これはこれでさすがに現代の哲学史でも無視されることはない。ただしその扱いはプラトン・アリストテレスには比べようもなく「ぞんざい」であり、その理由はその哲学が「実践」に重点があり理論はそのためのものという、実際はソクラテスの正当な継承だったにもかかわらず、近代以降の「存在論、認識論の理論重視」の哲学観によって低い評価しか与えられていないからである。

そのヘレニズム・ローマ期の哲学の源流ないし先駆となっているのがプラトン以外のソクラテスの弟子達だったことは哲学史の常識でもある。そのプラトン以外の弟子の筆頭になるのが「ストア学派」の源流となるアンティステネスであることも常識的に知られている。彼がディオゲネス・ラエルティオスによってプラトンと共にソクラテスのもっとも重要な弟子三人の一人に数えられているのは先にも示しておいたが、ちなみにもう一人のクセノフォンについては、著作はたくさんあるけれどもいわゆる今日的な意味での哲学的著作もなく、その著作群についても「学問性・系譜」のない人であった。しかしともかく彼は、良き人間たらんと誠実に己の信ずるところにしたがって生き、この「人生の形成」において優れていたために「代表的哲学者」と言われているわけである。このディオゲネス・ラエルティオスの哲学観は当然アンティステネスの評価にもそのまま現れており、彼はディオゲネス・ラエルティオスによって「人生の形成」「その人間のあり方についての洞察」において最大級の哲学

者とされていたのである。

さて、そのアンティステネスであるが、彼の生年も没年もはっきりしていない。とりあえず紀元前455年～360年頃ではないかという年代が推量されているくらいである。ということはおおざっぱに言うともソクラテスと15歳くらいしか違わない年下で、プラトンとは30歳弱くらい上ということになるわけである。ただこの激動の時代にこの年齢差は三人に同じ経験をさせてはおらず、また、ソクラテスが刑死したときアンティステネスは55歳を越えている頃というわけでもうすでにその哲学観は確定しており、プラトンほどにはその哲学に決定的な影響は与えなかったであろう。彼についての証言はほとんどディオゲネス・ラエルティオスになってしまうが、クセノフォンなどからもその人となりについてのいくばくかの証言を得ることができる。プラトンは、兄弟子であるにも関わらず、ほとんど何も言及していない④。

さて、我々は何にせよ「生きる」ということを問題にする人々というのは、その社会の中での「具体的人生」のあり方において問題を感じる人々だと考えておく。したがってその人が生きている社会のあり方というものにとりわけ問題になると理解する。それ故アンティステネスの問題とはソクラテスと同様「よく生きる」という問題にある限り、彼の生きていた社会のあり方というものが問題になる。それはいうまでもなく紀元前300年代に入る直前から直後のアテナイ社会ということになる。ということはもうアテナイ社会の衰退期ということで、彼はペロポネソス戦争の後半の泥沼、そして敗戦、それにともなう社会の混乱、とりわけ30人政治での恐怖政治と大殺戮、大量の市民の亡命と反政府運動、30人政治の崩壊、混乱の中でのソクラテスの死刑、といったような事件のただ中にいたことになる。これまでの伝統的な社会の倫理観は崩壊し、金や権力にすぎた風潮、「力こそ正義」とする考え方、こうした中でアンティステネスは「人間として良く生きることを」問題にしていたわけである。

こうした問題はもちろんアンティステネスが始めて問題としたわけではなく、むしろ師である「ソクラテスの問題」であった。アンティステネスはその「ソクラテスに惹かれて」弟子となっていたのであるからそのソクラテスの問題を自分の問題としていたのも何ら不思議ではない。これは他にも二人の代表的弟子と言われたプラトンもクセノフォンも変わりはないということも、特にプラトンの研究においてしばしば忘れられているようであるが常に意識されなければならないことだと思う。そしてそれはむしろ時代の問題であったといえる。したがって、ソクラテス、アンティステネスに続いて「具体的な生、実践的生」を問題とする人々が続々と続いて、結局「ストア学派」「エピクロス学派」「懐疑学派」といった「実践的生」を問題にするヘレニズムの哲学が生まれることになったのである。

繰り返すが「理論的哲学」の代表と見られるプラトンにしたって問題は同じだったのであり、プラトンはこんな時代にあったからこそ「ポリス（国家）とは本来いかにあるべきものなのか」「ポリスの正義とは」ということを自分の問題の中核にして追求していったのである⑤。このあたりを見誤って、プラトンの真実を「イデア論」としてのみ見、しかもそれを観念的な「存在論」ないし「認識論」とのみ理解するのは、「存在論史」の問題としてはともかく、少なくともプラトンの真意には届かないと言えるのである。またクセノフォンもこんな時代だったからこそ「人間としての誠実な人生」というものを意識して「身をもって体現」していこうとしたのである。

この「誠実な人生の体現」についてはアンティステネスも変わらないが、その「体現」の仕方が異なっていた。クセノフォンはアテナイ社会でも上層部の人間であったようで、彼の著作『アナバシス』に明らかなように撤退する傭兵軍を指揮するほどの人物で、彼の人となりが問われた時、「彼は人物としては申し分ないが、兵士のことを考えすぎるので傭兵を雇う側からするとあまり都合が良くない」と答えられるような人物であった⑥。また彼は縁あってスパルタを助け、その恩義に広大な家屋敷を

提供されるほどの誠実さと働きを示し、また著述家となりうる教養も社会を見る目も持っていた人物であった。その「誠実な人生」の体現の仕方はいってみれば「君子」的なものだったと言い得る。それに対してアンティステネスは「反社会的」となっていくのがクセノフォンとの大きな違いである。それには彼の出生も関係しているであろうと考えられる。彼は両親ともアテナイ人という「生粋のアテナイ人」ではなく、母親がトラキアの人だったようである。トラキア人は北方の辺境の民でしたがって野蛮人と見られていたようで、そのため彼は人から馬鹿にされることがあったらしく、それに対してソクラテスはその馬鹿にした人をたしなめた逸話がディオゲネスの「ソクラテス伝31」の箇所では伝えられ、「アンティステネス伝」のところではソクラテスがアンティステネスの武勇を賞賛して、もし彼の両親が二人ともアテナイ人であったら彼はかくも卓越した者とはならなかったろう、と言ったとか伝えられている。これは「出生の生粋性」をのみ誇り「人間としてのあり方」をみようとしないうアテナイの民に対する強烈な皮肉ともなっている。この逸話の基となるものは、伝えられているところによると前426年の「タナグラの戦い」でのアンティステネスのめざましい活躍がもとになっているようであった。そしてまたアンティステネスの方も両親がアテナイ人で生粋であることを自慢する人を軽蔑したと伝えられる。それに関わっては、彼も当時の市民の誰もがスポーツの鍛錬をしていたのにならぬレスリングに強かったようであり、自分の両親は別にレスラーではないけれど自分はレスラーとして十分な者になっている、と応じていたと言われている。つまり何にせよ「両親の生まれ」が問題になるわけではないということを書いたかったわけである。しかしいずれにせよ、アテナイ社会にすんなり受け入れてもらっていないアンティステネスが見られてくる。

そのアンティステネスは当初は弁論家ゴルギアスの弟子であったと言われ、そのため彼の著作にはゴルギアス風の文体が持ち込まれていると言われている^⑦。その後彼はソクラテスを知るに至って彼に惹かれ、自分の弟子共々ソクラテスのもとに加わったと言われているので、すでに弟子をもっている一人前の盛年になってからソクラテスの下に加わったことになる。しかし、一人前になって弟子までいるのに、その自分のあり方を捨てて弟子まで引き連れて別の人物の門下に加わるなど通常の間にはなかなかできることではない。ここには真実のためには見栄も外聞も捨てて良いとするアンティステネスの人柄がしのばれる。そして彼はアテナイの市内とは7キロ強ほど離れたペライエウス（現在のピーレウス港近辺）に住んでいたけれど、毎日ソクラテスのもとに通ってきたという。

この逸話一つをとってみても彼のソクラテスに対する徹底的な「人間としての傾倒」の態度がみてとれるわけであるが、これはソクラテスのフィロソフィアの内容、つまり「よく生きることについての知の愛し求め」に応じて「誠実に生きているソクラテスの姿」に傾倒している以外にはなく、それはつまり、彼は「理論」に惹かれたわけではなく「人間ソクラテス」に惹かれているのであり、自分もそうした「人間」になろうとしていたということである。要するに彼はソクラテスが言い出した「フィロソフィア」の内容を「現実的な人生の形成論」として理解していたということである。

一方、彼はいわゆる「キュニコス学派」の祖とされるが、それは彼の教えたところが「キュノサルゲス（文字通りには「白い犬」）の体育場であったためと言われている、とディオゲネス・ラエルティオスは伝えている。しかし、巷間にはこの「キュニコス学派」は「犬（キュオン、形容詞がキュニコス）のような生活ぶり」から命名されたと流布され、そのためこれはむしろアンティステネスの弟子のシノペのディオゲネスにこそふさわしいともみえるのだが、しかしディオゲネス・ラエルティオスはそうは言わず、はっきりとアンティステネスがキュニコス学派の祖であるとしている。したがって我々もそのように理解しておくべきであろう。

そしてディオゲネス・ラエルティオスは「キュニコス学派」の特質として「刻苦に耐えること」と「情念に惑わされない心」とのみを挙げており、別に「犬のような生活ぶり」を本質として挙げてはいない。ただし、これが実生活に反映したとき、当時の乱れた社会のあり方からして結果的に「社会

に噛み付く」ことになり、これがさらに徹底されて「反社会的生活」「社会の価値観の侮蔑」「野良犬のような生活」となっていったのは自然な流れであったろう。これがはっきり現れるのがアンティステネスの弟子のシノペのディオゲネスの場面だったわけである。しかしアンティステネスのところですでに「社会に噛み付く」態度はでており、そのためディオゲネス・ラエルティオスはアンティステネスを評して「口ではなく、言葉によって人々の心に噛み付くよう生まれついた犬であった」という評価をしてくる。しかしこれは「褒め言葉」とはなっても決して侮辱的な言い方ではないことは理解できよう。

実際、「噛み付く」とは言われても彼の人柄はむしろ親しみのある人物であったようで、ディオゲネス・ラエルティオスはテオポンボスの評価を伝え、彼はソクラテス門下の中でこのアンティステネスだけを賞賛し、彼は非常な才能を持ち、機知に富んだ会話によってどんな人をも自分の思うままに導いたと言っていたと述べて、それは彼の書物でも確認できるシマタクセノフォンの『饗宴』からも読み取れる、と述べている。そしてそのクセノフォンはアンティステネスについて、交際するにはこの上なく楽しい人であるが、他の事ではきわめて自制心に富んだ人であったと述べている、と伝えている。

しかし反面厳しいところもあったようで、とりわけそれは弟子に対してそうであったようである。伝えられているところでは、何故弟子にそんなに厳しいのかと問われて「医者だって患者にはそうしている」と答えたとか、弟子が少ないことを問われた時にも「銀の杖で彼等を追い払うからだ」とか答えたと言われている。銀の杖とは何なのか説明されていないけれど、多分「価値があるものだがそれで殴られると痛い」というような意味で、「教えは価値あるものだが厳しい」といった意味なのかと理解されよう。とにかく「労苦が善」であることを、困苦の冒険に生きたヘラクレスを例に出して説明していたらしいので、弟子たちにはその労苦を強いていたということは推察できるかもしれない。そして「快樂に耽るくらいなら気が狂っている方がましだ」などとも言っていた。そして贅沢を善きものとしている人々に対して、君の敵の息子達がどうか贅沢な暮らしをしてくれるように、と皮肉に応じたと言われるが、これは当然贅沢が軟弱な人間を造るという認識からであろう。そして彼自身の生活は当然質素なものとなり、下着などもつけず、着古した上着を二重におって上着と下着にしてしまった最初の人であり、あごひげを伸ばし、ズタ袋と杖を携えていたと言われている。実はこの格好はその後の（キュニコス的な）哲学者の定番とされたような格好であった。

しかし、彼は師のソクラテスのようにはなかなか自然体でそういう生活になっていたわけではないようで、頑張っただけでそうしていったらしく、ここにどうしても自分に強いていった無理が見えたようである。つまり、ある時自分の粗末な上着を翻してそのほころびが見えるようにしたとき、師のソクラテスからそのほころびからお前の虚栄心が見えてしまうよ、と諭されたという逸話が伝えられているからである。これは「ソクラテス伝36」のところにもでてくる逸話なのでよく知られた逸話であったのかもしれない。

しかし彼はともかく世の評価・評判というものとは無縁にありたい、むしろそうあるべきだと考えていたようで、孤高を保とうと努力していたようである。それ故「お世辞を言うような人間の間で生きるよりむしろ鴉の群の中に居たい」とか「悪い人たちから褒められると自分が何か悪いことをしたのではないかと心配になる」とか、プラトンがアンティステネスの悪口を言っていると聞かされて「立派なことをして悪い評判を立てられるのが王者らしいのだ」とか言っていると伝えられている。

こんなアンティステネスはどうも名門の生まれで気位の高かったらしいプラトンとは肌合いが合わなかったようである。プラトンがアンティステネスのことをその対話篇の中で全然言及していないことは先に紹介したけれど、アンティステネスの方も「鼻息の荒い馬」にプラトンを譬えて揶揄していたという逸話も紹介されている。馬はこの当時「貴族」のシンボルであったから、プラトンを「鼻息

荒い鼻持ちならない貴族」になぞらえたわけである。もっともクセノフォンとプラトンも仲が悪かったと伝えられており、天才肌のプラトンが何かしら仲間うちでは気にさわるところがあったのかと思われる。実際プラトンの著作にクセノフォンも名前すら全然触れられておらず全く無視されている。他方のクセノフォンはプラトンの名前くらいには言及している。同じくソクラテスの門下とはいっても大分気質の差があったようなのが興味深い。この気質の差が、同じような問題意識を持ちながらもその哲学のあり方を三者三様にしていっただのである。

そのアンティステネスの思想であるが、ディオゲネス・ラエルティオスのまとめによるとそれらは「あるべき人生」についての「証言」ばかりで、それを確立する世界解釈の理論ではない。こうした形で「証言」を大事に残すのがディオゲネス・ラエルティオスのやり方であった。ただし彼はストア学派の理論などはかなり詳細に要点を説明しているので理論を無視しているわけではないのだが、大事としているのが「証言」だというわけでそれは当時の哲学観をよく反映していると言えるわけである。

まずその思想はソクラテスの名前とともに有名な「徳は教えられ得る」ということ、また「有徳であることが高貴ということ」を証明することであったとされる。これが核となって、さまざまのことが言われてきて、「幸福は徳だけで足りる」「ソクラテスの強さ以外何一つ必要ではない」「徳は実践の中にあり、多くの言葉も学問も必要ではない」とされたようである。

もちろん「有徳であることが人間として高貴であるということ」「幸福は徳だけで足りる」というのはソクラテス自身が示していた解答であり、アンティステネスはソクラテスの問題をそのものとして受け継いで、その「徳」に関して「徳は実践の中にあり、多くの言葉も学問も必要ではない」としたわけであり、このことが哲学史で評判が悪いわけであるが、しかし、これもある意味では当然のことを言っているにすぎない。つまり、我が国の言葉に「論語読みの論語知らず」という言葉があるけれど、これは、いくら論語を勉強して論語の解釈ができてでも儒教の本来の目的である「君子的あり方」が実生活に反映されていないのではそれでは論語を知っていることにはならないという意味であろう。ソクラテスの真実も「良き人となる」というところにあっただけであって、世界や存在についてうまく説明できるということが本来の問題であったわけではない。アリストテレスの言葉「理論に逃げ込んでそれで哲学をしているつもりになっている」人々に対する批判を思い起こせば、古代において哲学がどういう意味をもっていたかを良く理解できるであろう。これに対し、実生活のあり方など全然関係なく、ただ「優れた理論体系さえあれば優れた哲学者」とされるのは近・現代の評価だと先にも指摘しておいた。それは時代の要請であろうからそれはそれで仕方ないけれど、だからといって古代の哲学者の評価までそれで終わりではひどく公正を欠くと言えよう。つまり、その時代にとっての意味をきちんと位置付けておくべきであると言えよう。

アンティステネスに戻ると、ディオゲネス・ラエルティオスはさらにアンティステネスの言葉として、賢者は市民生活を送るに当たって既成の法律習慣にしたがうのではなく「徳の法」にしたがうものだというものを紹介してくる。しかしこれを実際に遂行しようとすれば結局「反社会的態度」になってしまう。ソクラテスはみずからそういう言い方はしなかったけれど、プラトンの弁明篇全編で繰り返されている「市民皆さんの言うことより神に従う」とのソクラテスの主張はこのアンティステネスの言葉の源と言え、それ故ソクラテスは反社会的ということで「社会に殺されてしまった」のである。なぜなら社会の法律は必ずしも「徳性」を旨とはしておらず、むしろ人間の欲望の充足の方向に秩序を立てようという傾向を持っていると見なせるからで、しかもしばしば権力者に偏るからである。これは今日でも全く変わらない。だからローマ時代に「哲学者の追放令」などが出されたのである。当時の哲学者が、アンティステネスの系譜にあるストア学派に限らず、大体このアンティステネス的な考え方を継承していたからであろう。つまりアンティステネスは師であるソクラテスの人生に対する

態度をはっきりと意識的にさせてそれを主張、実践していたと考えられるのである。

さらにディオゲネス・ラエルティオスはディオクレスの記録しているアンティステネスの言葉を紹介してくるけれど、その中に身内の者よりむしろ「正しい人」を重視するとか、「徳」は男子のそれも女子のそれも同じであるというものがある。共にソクラテスに源を帰すことはできるけれどその主張のあり方は強烈で、特に後者の「人間の徳性における男女平等論」は当時の社会通念に真っ向から刃向かうような主張であったと言える。しかも彼はプラトンのような「学園の学者」ではなく「市井の人」として生きていたからその反社会性はより目立ったことであろう。

一方この「徳性」の獲得について、アンティステネスはソクラテスの徒として「思慮」や「理性」を重んじことも伝えられており、思慮はもっとも堅い城壁であり崩れ落ちることもなければ裏切りによって敵の手にわたることもないと言い、さらに人は自分自身のゆらぐことのない「理性の働き」の中に城壁を築かねばならないとも言っていたと伝えられている。従って彼は「ただの生活者」であったわけではなく、以上に見てきたようなその人生のあり方についての理性で納得できる「証言」も持ち、そして多分それを確立する理論も持っていたのだろうけれど、この「理論体系」に関してはおそらく歴史を生き抜くだけの力がなくほとんど何も残されていない。

こうしてアンティステネスはストア学派の「もっとも厳格なタイプの派の開祖」となったのであるとディオゲネス・ラエルティオスは評価をし、シノペのディオゲネスの「不動心（アパテイア）」、その弟子のクラテスの「自制心（エンクラタイア）」、そしてストア学派の祖となったその弟子のゼノンの「堅忍不拔の心（カルテリア）」といった概念に道を開いたと言ってくるのであった。

なお彼の著作としてたくさんの書名が伝えられているけれど残念ながらそれらすべて散逸してしまい、現在ではこのディオゲネス・ラエルティオスなどから拾い上げられた断片的なものしか存在しない。

その断片の中でいわゆる近代的哲学に近い論議の一つとしてアリストテレスが伝えて有名になっているものに「何物も、それに固有の言葉によってしか語られ得ない。すなわち一つのものについては一つしか語られ得ない」^⑧というものがある。この言葉に前後関係がないので文脈が分からずアンティステネスの真意は分からないのであるが、一般にはプラトンのソピステス篇（251A～C）に基づいて^⑨、たとえば人間について我々は「人間」という一つの言葉だけで語るのではなく、色やら形、大きさ、徳性など「多」によって語るものなのだが、ある人々は多が一であったり、一が多であることは不可能であり、したがって人間については人間とのみしか言い得ないと主張している、と言っているその主張者がアンティステネスなのだろうとするようである。そしてこれはプラトン自身が「知的な財産が貧弱だから」という言葉で切って捨てていて、アリストテレスの証言と重ねるとアンティステネスの「知的貧弱さ」を指摘する言葉と見えるのであるが、ただしプラトンはそこでアンティステネスを名指ししているわけではなく、むしろ文脈的にはエウテュデモスなどのソフィストを指していると理解したほうが当たっている。

ソフィストの場合にはこれは「言葉の戯れ言」をもっともらしく相手を煙に巻く「知的貧弱さ」が指摘されてもそれは当然であろう。しかしもしこれが世界を論理哲学的に理解しようとした時の言葉であるなら $A = a, b, c, d \dots n$ と連ねていっても $A = A$ とは決してならないという存在理解の限界をいうことになる。

これについてディオゲネス・ラエルティオスは、アンティステネスは「言語」というものが事柄の何であったか何であるかを明らかにするものという言い方で「言語」の定義をした最初の人である、と言っている。だとしたら「言語による定義的説明」を主張していたことになるからプラトンの批判はアンティステネスには全然あてはまらないことになる。これは彼が弁論家ゴルギアスの弟子であったことからの見識であったのかもしれないが、にも関わらずアリストテレスが指摘している見解をもっていたのだとしたら、同時にその限界も悟っていたのかもしれない。またあるいは、これが多分アン

ティステネスの真意かもしれないが、「現実にいる」事物を説明しようとしたとき、それはすでにその事物を自分とは関わりのない他者として「もの化」して、言語という記号に置き換える作業をしているにすぎずその事物の有り様を決して説明しない、ということかもしれない。つまり「リンゴ」を美味そうと思ってがぶりとやって甘酸っぱい汁が口の中にブワッと広がっていく「そのリンゴ」は決して「多」なる言語は説明しないわけで、「リンゴはリンゴ」としか言い得ないわけである。こうした存在のあり方をいう言葉であったとしたならそれは十分に傾聴に値する言葉であったといえるであろう。

以上のようにみえてくると、アンティステネスはソクラテスが身をもって示した生き方を「意識化し自覚的にした人」つまり「ソクラテス的生き方」を一つのタイプとして確定した人であったと位置づけることができよう。そうした意識的な生き方において多くの人々にその人生の形成論としての哲学のあり方を説くことができ、そうであることによってそうしたタイプの弟子を持つに至り、後に続く人々によって「不動心」とか「自制心」とか「堅忍不拔の心」といった概念を導出せしめ得、こうしてストア学派を用意することになったと言えるのである。

さて我々はこうしたアンティステネスの哲学のあり方をどう評価したらいいのであろうか。今日哲学者を名乗る人々はほとんど書齋にこもって世界の解釈の仕方を論じているだけで「人間の生き方、社会のあり方」については何も問題にしないと見える。また他方で社会や人生を語っている人々はそこに心底から人間を見据えた「証言」や「論理」が見えない。こんなのが現在の世界の状況だとしたら、やはり「哲学の本義」は失われているとしか評価できないであろう。我々はこんな時代だからこそとりわけもう一度ソクラテスやアンティステネスの精神に戻ることの必要性を感じるのである。

注

- ①、ニコマコス倫理学、1105b13。ここの言葉は「倫理学」の言葉だと思われがちであるが、アリストテレスにとって「哲学」と「倫理学」が異なっているものだという認識はない。そんな区別は現代の区別であり、古代にあっては別ものではない。だからアリストテレスははっきりと「哲学」と言っているのである。
- ②、2巻5章、「ソクラテス伝」47。ここで彼ら三人を挙げた上で「10人衆」と言われている人たちの中で著名なのはアイスキネス、パイドン、エウクレイデス、アリストティッポスの四人である、という言い方をしている。従ってディオゲネス・ラエルティオスはクセノフォンについてこの四人を取り上げてくる。
- ③、このあり方が見事にストア学派やエピクロス学派に現れていることは哲学史の常識に属するであろう。彼らの課題は現実に「良き人として生きる」ことにあり、その証言として「徳」のありかた「心のあり方」としてのアパテイアやアタラクシアを主張し、そのための世界観としてストアの世界観、エピクロスの唯物論的世界像の理論があったわけである。
- ④、パイドン篇の冒頭でソクラテスの牢獄に参集してきた人々の中に数えられているだけ。
- ⑤、プラトンの主著とされているのが、初期作品は弁明編、クリトン篇などであり、中期にはゴルギアス篇、プロタゴラス篇、国家篇など、そして晩年の書が法律篇であり、その他多くの対話編が「社会」というものを問題にしていたことを忘れてはならない。そして第七書簡で、命の危険があってもシシリー島でのディオンの革命に助力のため赴くことを「哲学者としての使命」と言っていた事も忘れられない。
- ⑥、七巻、六章。この巻ではクセノフォンが未払いの給与を支払ってもらうために必死の働きをしている様が報

告されている。

⑦, アンティステネスが弁論家ゴルギアスの弟子であったことは、ゴルギアスが批判的に理解されているため意外に映るかもしれないけれど、ゴルギアスは当時の社会が望んでいるような社会人として活動していく術を問題にし、その人柄も誠実であったことはプラトンの描きからさえもよく読み取れる。アンティステネスはその誠実さに惹かれてゴルギアスの弟子になっていたのだろうけれど、ソクラテスはその遙か上を行く男であったからアンティステネスがソクラテスを知るやすべてをなげうって弟子になったのもよく分かるし、アンティステネスの求めていたこともこの逸話からよく読めてくる。

⑧, 『形而上学』 5巻29章。1024 b 32～35。

⑨, 251A～C。ここでは以上の主張をする人の名前は挙げられておらず、ただ「晩学の人」という言い方がされているだけである。これをもって年長のアンティステネスを当てこすっているとも見えるけれど、この主張はエウテュデモス篇においてソフィストのエウテュデモスやディオニュソドロスなどの主張とされ、実際そこで彼らは「晩学の人」と言われているので素直にエウテュデモスたちと理解していいであろう。